

指示と自己指示

——自己指示の議論とフッサールの現出論——

塩川 千夏

序

「あれ」や「これ」といった指示詞が多用された話は聞きづらい。話し手にとって明白な指示対象を、聞き手がなんとか推測しながら話についていくというのは、幼児との会話などでよく経験することである。指示詞というのは、意味の最も原始的な姿なのかもしれない。つまり、その時、その場面での、本人とその対象との関係だけに基づいた、だからこそ原初的な、そしてきわめて自己中心的な呈示方式なのである。そこには、暗黙のうちに、指示主体である「私」が常に前提されているといえよう。「私」とそのつどの状況との関係に支えられた独我論的な語り。それが指示詞の世界である。こうした具体的な指示関係の主観的性格は、意味機能としての弱点でもあり、客観的な論述や報道においては、乗り越えられるべきものであろう（無論、共有可能な文脈を形成しながらの指示も可能であるが）。逆に言えば、客観的一般的な意味内容は、「この今、この主体」の偶因的状況を捨象して成立しているといえる。だが、その意味内容が真に生かされるのは、そのつどの思考や行為の文脈と結び付けられた時なのではないか。つまり、意味成立や意味伝達は、直接・間接に「この私」と関連づけられる文脈が参照され、パースペクティブの意味連関が形成されることを条件としているのではないか。この文脈ないしは状況と意味との関係について、指示表現の分析から解明することができよう。そして指示は常に指示体系の基点としての「私」の自己指示と結びついているのだ。

分析哲学においてカスタネダの指標詞「私」の分析や、指示と自己指示をめぐるペリー、ルイス、チザムらの議論は、フレーゲ的な客観的意味論の規定からはずれた、指示や自己指示の独特な意味機能から、意味とそのつどの意味生起の状況との関連について重要な問題を提起している。そしてこの議論は、現象学ともある点で問題意識を共有しているといえる。フッサールこそ、心理主義を拒否して意味のイデアールな客観性を確立することから出発しながら、意味とそのつどの私の意味体験、そのつどの事象現出との関係を徹底的に考えてきたのであるから。本論は、指示が前提する偶因的状況、およびその状況把握の自己意識的性格という議論を、フッサールの現出論からとらえ直す端緒を示したい。

1 分析哲学における自己指示論

1.1 フレーゲの意味論における指示表現の特異性

指示詞は意味論の中でも特殊な性格をもっている。「AはBである」という通常の文は、AやBについての知識さえあれば、この文が書かれた場面の厳密な知識を参照せずともさしあたり理解可能だ。しかし「これはBだ」という文章は、発話者が何を指して「これ」と言っているのかが特定されねば理解不可能である。発話者が「これ」を指示するための状況を補って解釈する必要がある。指示詞が、意味論的難問を含むことは、すでにフレーゲが指摘している。「これ、あれ」などの指示詞、「今、きょう」もしくは人称代名詞などの指標詞は、発話の文脈によって指示対象が変動するため、状況を越えた真理性を要求するフレーゲ的思想の表現からはずれている。その内容の正しい把握には「発話に伴う一定の諸条件」を知らなければならぬ。つまり「指差し、手振り、眼差し」か、何がしかの文脈上の知識が補われることによって、はじめて何が指示されるのかが決定される。

ただし、単に文脈上の知識という補完が必要というだけですまないのが、人称代名詞「私」である。フレーゲによれば、「各人は、彼がいかなる他人に対しても与えられないような、ある独自で根源的な仕方自分自身に与えられる。」つまり、「私」と発話者との独自の関係は、本来他人の与り知らぬものだという。ただ、それでは「私」を含む思想は「ただ彼のみが把握しうる」ものとなり伝達不可能なので、「私」は他の人々にも把握可能な意義において、たとえば「この瞬間に君達に話しかけている者」という意義で用いなければならない(Frege[1918], S.66)。フレーゲはこのように話を収めて、「私」という語の使用についての伝達可能性の困難を回避しようとした。それに対し、指標詞「私」が決して客観的記述によって代替できない、と主張したのがカスタネダである。

1.2 自己指示の特異な意味機能

カスタネダによれば、「私は……である」という文における「私」は、いかなる記述によっても、たとえば固有名や、発話者を確定できる記述によっても、意味を変えることなしに置き換えることはできない。さりとしてそこで私的な意義があるのではなく、自己指示の特種な機能を伝達可能なものとして示すため、間接文中の三人称の特種な用法「彼*」を提案した。例えば

『理念』の編集長は「彼*」が重責を負うことになるを知っている。」

という文があったとしよう。この間接文中の「彼*」は「彼自身」であり、直接話法中の「私」に対応する。(しかし『理念』の編集長と「彼*」が同一人物を指すこと自体は、「彼*」の信念内容には入っていない。)ところで「彼*」が『理念』の編集長を指すことは明らかなので、次の言い換えは一見可能なようである。

『理念』の編集長は、『理念』の編集長が重責を負うことになるを知っている。」

この文は、確かに『理念』の編集長である人物が『理念』の編集長が重責をもつことを知っている」と主張してはいる。しかし重責をもつ者が、他ならぬ彼自身で

あると彼が知っているかどうかは、この文から確かめられない。極端に言えば、彼についての新たな人事決定を、当の本人が知らないまま、『理念』の編集長の立場について一般的な信念を持っている可能性も排除できない。またこの人物の固有名を代入しても、元の文と同義にはならない。彼がその名を自分のものと自覚しない可能性もあるのだ。カスタネダは、この「彼*」を含む文のみが主文の主語にとって「自分自身についての」(de se) 信念を含意し、いかなる名、もしくは確定記述によっても置き換えが不可能であることを明らかにしている(Castañeda [1966])。信念文中の「私」や「彼*」の特異性は、この自分自身について知の特殊性である。それは客観的な事物や事態についての知に置き換えることが不可能である。この自己指示の特殊性は何に基づくのか。一般に、指示の確定は、指示行為の状況、文脈によって決定される意味論的—行為論的 (semantico-pragmatic) な事柄であるが、中でも一人称単数は、当の言語行為自体を通してその行為主体が指示されるため、不可謬である。この一人称の発話反射性についてはすでにライヘンバッハも指摘しているが、カスタネダは自己指示の特殊な優位性として、「指示対象がひとつに決定される」「指示対象が存在しないということはありません」「他の指示詞とは異なり、知識の再現において、他の名や記述に代替不可能」という性格を挙げている¹。

こうした「私」の優位性がデカルト的なコギトの明証性を想起させることを、カスタネダ自身が認め、「私」の不可謬性を、世界についての諸記述、諸知識から明確に区別している。(Castañeda [1999], p.94,188)。次にこの自己指示によって示された、自己知、信念文中の「自分についての (de se) 態度」が、特殊な知であるにとどまらず、むしろあらゆる状況についての知に、暗黙のうちに前提となるのではないかという議論について検討したい。

1.3 意味成立の条件としての自己指示の議論

直示文では、話者の状況を通して、指示が成立した。ところで、どんな状況も、なんらかの意味で自分に関わるといえる。すると自分がある状況にあることを知ることなしに、そもそも指示は成立しないといえる。つまりあらゆる指示は自己指示に基づくと考えられる。シューメーカーは、直示語による指示システムの成立は、潜在的に自己指示を前提すると論じている(Shoemaker[1968])、カスタネダの議論をはじめ積極的に取りあげたペリーは、「自分についての(de se)態度」は、ある文脈内に自分をおきいれることをはじめ可能にすると分析する (Perry[1979])。たとえば、図書館内で記憶を喪失した男は、図書館のあらゆる知識をもってしても、自分が何者であるかを知ることができない。また詳細な地図も、自分がどこにいるのかをそこから読みとることができなければ使いものにならない。健忘症の男に欠けているのは、知識ではなく、それを自分の状況と情報をむすびつけること、いわば直示を含む文を通して把握することだ。「私は、ルドルフ・リンゲン、弁護士である。」

¹もっとも代替不可能性は完全なものではなく、ある人の「私」という指示を、別の人は名や記述に置き換えねばならないが、この不完全性は伝達のためには必要なことである(Castañeda [1966], p.144f.)。

「ここは図書館内2階のレファレンス・コーナーである。」等々。ペリーは、こうした直示語を含んだ文の意義を「役割」とよび、文脈内に自己を局所化させる新しい意味論的機能であるとした。自身をある文脈内に位置づけることができはじめて、指示が決定し、指示対象と自分との関係が明確になる。ある人物に危機が迫っているという情報を、よく解析したら、ターゲットになっていたのはまさに自分自身であった、という例を考えればよくわかる。それを知るや、もはや単なる客観的知識の問題ではなくなる。直接自分が指示されていない場面でも、たとえば黒板に「本日6時に会議がある」と書かれていたとしよう。それがいつ書かれた文であるかが、またそれを読んでいる現在が何時であるかも問題であり、場合によっては直ちに会議室にかけつけなければならなくなる。自分の状況をどう読み取るかによって、振る舞いも変化する。このような知は、客観的思念というよりパースペクティブ的な状況把握にかかわる自己把握であり、自己についての知が前提となる²。さらにルイスは、ペリーの提案を拡大して、すべての信念は自己を位置づける信念であるとした³。フレーゲ的な一般的言表に対する (de dicto) 信念も、論理的な空間に関して自己を位置づける信念であり、すべての信念は自己を位置づける信念に基づき、性質の自己帰属化(self-ascription of properties)に基づくと主張する⁴。

これらの議論から、直示表現のエッセンスは、このパースペクティブ的な状況把握にあり、その不可欠の前提として自己指示、自己知があるというテーゼを抽出したい。その上で、問題となるのは、このパースペクティブ的な知の性格が二つの方向に展開可能ということだ。まず、自己を状況づける知は、実在論的な方向性を強くもつ。直示体系が、知覚という直接的体験を基本とするものであることのみならず、行為や振る舞いに直結するなど、リアルな行為因果的ネットワークの中に、自分を読み込む知であると考えられるからだ。つまり指示の状況ないし文脈を、意味の観念性と対比させて、自分自身をも規定するリアルな状況と考える方向性である。実際、直示表現から志向性の問題へつなげようとする「心の哲学」の論者たちには、実在論的方向性が強いといえる。他方、私が位置づけられる状況は、あくまで私が解釈する状況ともいえる。状況を自己把握する「私」の契機を強くとれば、よりデカルト的な、ある意味で観念論的な方向にも展開しうる。カスタネダのガイズ理論などは、分析系の土壌から出発しながら、ドイツ的な自己意識に基づく哲学に近づくようにみえる。

カスタネダのガイズ理論によれば、われわれの経験はすべて、常に「私は（今、ここで）……と思う」という形式を暗黙に有する。デカルト的な懐疑に耐える点で

²野本氏によれば「振る舞いの変化に対応するのは信念内容や知識内容ではなく、内容の呈示の仕方、把握の仕方にかかわる意味論的因子」である。野本和幸[1997]、361頁。

³ Lewis, D[1979].

⁴「性質帰属化」の理論に対し、カスタネダは次のように反論する。潜在的な自己関係からどうして顕在的な自己意識が明らかになるか。また潜在的な自己関係が思考内容に何か積極的役割をもつといえるか。意識と自己意識の区別を明確につける必要がある p.96-142)。カスタネダにとって自己意識はあくまで命題的知であり、逆にペリーやチザムからはカスタネダは、自己関係を、いまだに命題の中に位置付けていると批判されるのである。

非世界的であるとともに世界経験を包括するこの形式を、カスタネダは「超越論的プレフィクス」(transcendental prefix) (Castañeda[1999], p.189) と呼ぶ。この「私は思う」によって包括されている全経験(彼はこれをバルーン(Balloon)と呼ぶ)の個々の内容を、彼は対象でも意味でもなく、ガイズ(guise)と呼ぶ。ガイズとはそのつどの経験対象、事態の外観、アスペクト、もしくは現れ(appearance)と言いかえることができる。このガイズは、フレーゲ的な意味論の読み替えを通して導入されているが、フレーゲ的な「意義」(Sinn)と、複数の意義によって示されうる同一の指示対象「意味」(Bedeutung)という区分をもはや持たない。彼はフレーゲ的な意味論的区分を解体し、すべての意味を一元的に個体的ガイズとみなす、ガイズ一元論を主張したのである。私がどのような状況に規定されようとして、それを規定する私のI-ガイズに包括されていると考えれば、状況の起源(origin⁵)となっているのはこの私なのだ。その点を強調すれば、カスタネダのガイズ論は、超越論的観念論と呼びうる性格をもつ(彼自身は否定しているが)。ただ、ここで注目したいのは、カスタネダの場合、この超越論的I-ガイズ自身の現象性格を考えている点である。

そのつどのトークンにおける「私」は、不可謬であっても、やはり一つのガイズである。「I-ガイズ」は、すべての内容を信念文中に包括する特権性を有するが⁶、その内容を包括する限りの「今」「ここ」のガイズという限定をもつ。つまりある時、ある時における経験という性格をもつ。カスタネダのコギトは「はかない」現象性格をもつのだ⁷。超越論的な機能をもっている、自身が経験の内容となる限りは、経験的なバルーン内部の「考える主体」として表される。「超越論的自己を現象学的に繋ぎ止める、経験的な自己が必要である」というのだ。(Castañeda[1999], p.188f.)。ここでキーワードとして「現象性格」が浮かび上がる。カスタネダも自身の理論をphenomeno-logic、つまり現象する論理と呼んでいるのであるが、自分自身がガイズとして現象することは、さきほどのペリーやルイスらの議論でいえば、自己が位置づけられる状況と再び結び付けられる。しかし状況を構成している超越論的な「私」は、バルーン内の一切の命題的内容に先行しているのであるから、この現象する私も超越論的「私」に構成されたものにすぎないのか。ならば超越論的プレフィクスの定式「今、ここで、私が思う」の、「今、ここ」という現象的規定はどう解釈すればいいのか。ペリーらの議論にしても、「私」をある状況に位置づける際、位置づける「私」と位置づけられる「私」に分裂はないのか。自己指示が生起する状況が語られる際、その現象性格はかなり複雑な問題を孕むのではないか⁸。そして、この先

⁵ 世界の origin であっても source や root ではないと強調している (Castañeda[1999], p.96.)。

⁶ これは大きく分けると超越論的プレフィクスに直接従属する指示的事実と、非一指示詞的、間主観的事実に分けられる。(Castañeda [1999], p.196)。

⁷ 通時的「自己」は、こうした個々のガイズから通時的同体化(transubstantiation)によって事実的に再構成されたものにすぎず、強い意味での自己同一性を主張するものではない。

⁸ たとえばチザムは知覚という志向性の定式化を積み重ねることによって、それが存在する他なるものの現れの知覚であるというための条件を分析している。(Chisholm[1981])。そこで彼は、「感じる」という、生理的にもきこえかねない語を、be appeared to (「現れを受ける」)という独特な受動態で言い換えている。そうすることで、知覚することと、何かが現れることは、二つの仕方でも語られた一つの事態であることが明確になる。

の議論については、フッサール現象学から展開可能なのではないか。

2 指示論と現出論

2.1 指示表現と志向性

意味成立の条件としての指示の問題は、フッサールの志向性や現出論の発想にも深く通じている。自己意識の明証性があらゆる客観的知識に先立ち、意味の条件となるのは、いうまでもなくフッサールの超越論的現象学の出発点である。他方で知覚経験の分析を重視するフッサール現象学には、指示論と共通の地盤もある。

まず『論理学研究』における、指示詞の分析から考えてみたい。指示詞的表現は、そのつどの状況によって指示対象が変化するため、「本質的に偶因的な表現」と呼ばれる。こうした表現は、状況にかかわらずイデアールな同一性を保つという『論研』の意味論におさまりにくい（この点の事情はフレーゲの意味論と類似している）。そこでフッサールは第一研究において、指示詞もまた意味を介する表現であり、指示の仕方を指定する「指示する意味」と、その指示によって思念される「指示される」意味が独特の仕方で重ね合わされたものと分析している。指示詞は「個的な表象と協力して、その表象の対象を、今ここで思念されているものとして告知する」(LUII/1, S.83) ののである。そのつどの偶因的状況によって変動するのは「指示される意味」、つまりそのつど思念される指示対象である。他方、「指示する意味」は指示機能の一般性、普遍性を表しており、「意味」としてのイデアールな同一性を保持している。この「本質的に偶因的表現」と呼ばれる指示詞の分析は、志向性の分析に伴い、単に特殊な意味機能ということに収まらない意義をもってくる。

指示詞の意味は、概念を介する表現ではなく、「指示する意味」と「指示される意味」を重ねあわせるために、通常の意味とは異なる契機を必要とする。この契機、つまり知覚的直観は、フッサールの志向分析において無論きわめて重要な役割もっている。目の前のものを指して「これ」というとき、その対象への志向を成立させるのは、概念的意味ではなく、対象の知覚それ自体である。「本質的に偶因的な表現は、直観が付け加わることによって規定される。」(LU II/2, S.18) つまり知覚的直観は偶因的表現の不特定な意味的要素を規定し、対象的方向を与える。そして志向性の普遍的な成素は直観の中で充実される (ibid., S.19)。この分析から、概念的意味志向とは区別された、しかし志向性にとってきわめて重要な、意味充実化という直観の機能が浮かび上がる。その点で、指示表現は決して例外的、周辺のな問題ではなく、それどころか、知覚的志向性はこうした直観にもとづいて充実されるゆえに、すべての知覚的経験には指示の契機が認められるとさえいうる。だから、後に、偶因的意義について、「綿密に検討してみると、あらゆる経験的述定の意義もやはりこの一種である」(LUI, S.XIV) とのコメントがなされているのであろう。知覚的に出会われる個々の対象は、指示表現を使用するかどうかにかかわらず、「この（今、ここ、もしくは目の前の、）対象」であり、それが知覚される状況を通してのみ与えられるということを考え合わせれば、このことは理解できる。その後フッサールは、

指示詞自体を中心に論じることはしていないが⁹、知覚を基本とする志向性分析自身のうちには、指示の問題が実は豊かに展開されているといえる。

D.W.スミスは、フッサールにおける指示の問題が論研の議論にとどまらず、志向性の構造自体にかかわってくることを指摘し、指示表現における「指示された意味」、つまり指示対象に相当するのは、ノエマの対象極 X であると解釈している¹⁰。「このー」「これ」のような指示詞で表現されているのは、指示対象そのもの、つまりすべての述定から抽象された、しかし経験の過程を通じて様々な述語の担い手となる「この」客観にほかならない。そして「指示する意味」は、その対象との関係を可能にする現出様態に相当すると解釈できる¹¹。ノエマ構造では、所与性の様態、対象の「与えられ方の Wie」に対応する契機であると考えられる。これが、いかに対象があたえられているか、いかに意味が充実されているのか、現に今日撃しているのか、あるいは単なる空想なのかを示す意味の契機であり、静態的分析でありながら、認識関係成立の起源が示されているのである。こうした考察は、指示機能を志向性自体の根本的な性格として考えたための有意義な手がかりを与えてくれる¹²。一步ふみこんで言うと、指示を可能にする偶因的状况というテーマは、志向を可能にする現出様態の問題の中に組み込まれていくということが出来る。つまり指示論から現出論への転換という見方が可能なのである。

2.2 指示論の二つの方向と現出論

フッサールに指示論を読み込む論者達の中には、『イデー』期以降の議論をあまり評価しない傾向もみられる¹³。つまり指示がひらく関係の實在的性格は、『イデー1』の超越論的現象学とは相容れない、つまりあまりに観念論的に見えるというわけである。ここでふたたび指示論がもっていた二つの解釈の方向、すなわち實在論的方向と観念論的方向について、フッサール現象学の中から考察してみよう。

フッサールにとって、対象と志向作用との関係は實在関係ではない。その意味では最初から志向性の議論が實在論に定位することはありえない。だが、知覚志向性の分析は、志向が實在的なものへと向かう、その實在への方向性を扱っていることも確かである。この点を説明するならば、まず志向性構造の中で問題になる指示

⁹ 後年フッサールが偶因的表現について触れている例として、偶因的判断の意味を間主観的に理解可能にするものとして、経験世界の類型的地平について論じている FTL の箇所が挙げられる。(FTL § 80, S.177)

¹⁰ D. W. Smith (1984), p.202.

¹¹ Ibid., p.209.

¹² 『論研』における指示分析と『イデー1』のノエマ論がストレートにはつながらない点もある。『論研』では対象との関係を与える知覚的直観作用は、意味作用に寄与するが意味の担い手にならないとされていたが、それは空虚な意味作用とその充実化とが異なる作用として峻別される『論研』の統握理論からするとらえかたである。しかし直観的な意味充実とその対象の「何であるか」、一般の意味による述定性格との関係を、心理主義に陥る恐れなく志向性構造の中に反映させたのがイデーの分析であるといえる。そこでノエマでは直観的充実によって与えられる指示関係と述定的意味が統一的に構造化されているのである。

¹³ Ex., Mulligan, K. and Smith, B.[1986]

性格はあくまで意味の成分であり、対象極 X は当然のことながら、日常我々が考えている実在的な対象のようなものではない。さまざまな現出に統一を与えるという意味では理念的な機能をもつともいえる。現出に動機づけられ、体験の中から対象への方向づけが形成される、その構造があくまで問題にされているのであって、実在的な対象を関係項として前提することはできない。だが、それは志向性を反省する視点にとっての問題である。知覚しつつ対象志向する作用自体が現実のなにものかをとらえようとしていることを否定するものではない。対象の現実性はたえずそのつどの現出経験を通して試されているものであり、体験の経過によってはそれまで把握されていた対象の「現実中存在する」という性格は抹消されるであろう。志向性は常に未完結である知覚のプロセスに対応するものである。このプロセスは、「現実の事象をとらえているかどうか」を基準にしながらい進んでいくのであり、そのつどの現出を超える対象を志向する志向性の超越構造は、この現実志向にもとづいている。

このプロセスは、空間構成の分析をてがかりにするならば、指示空間の問題としてみてとることができる。私が見ている「その」対象は、私の身体がおかれる「ここ」からとらえられた「そこ」であり、その指示空間の遠近関係はキネステーズ身体姿勢や運動可能性をとおして測られている。私の身体がある「ここ」はその根源的な近みのために、遠さや近さそのものの原点となっているが、客観の把握において、この原点たる「ここ」は特権化されたままではない。このいわば自己中心的な与えられ方を超えて、客観的事物が構成される。「すべての事物はその暫時的な移動する地平におけるその位置に依存せず、それがあるところのものである。・・・それは常に一つの手帳において私に与えられているが、地平のすべての変動において同一のものである。」(Hua. XVI, S.318) そのつどの与えられ方をこえた事物の客観性は、身体が動くことによって可能になる「脱中心化」的な把握のまなざしによって与えられる。知覚空間で生きられる対象との関係のリアリティーは、中心化—脱中心化という動的なプロセスの中でとらえられるべきものである。こうした分析は、ペリーの「自分を位置づける知」にも対応する内容になっており、意味成立の条件としての自己指示は、私の「今、ここ」があらゆる指示の原点になるというフッサールの分析にも、よく似た議論であるといえる。知覚的对象の把握は、知覚する自身の状況の自己把握と不離の関係にあり、そのつどの偶因的状況や身体的遂行に依存しない超越的なものとして、実在的事物を体験することも、こうした自己把握に基づいて可能になる。フッサールの分析において強調されるこの超越へのダイナミズムは、実在的对象を前提にしないからこそみえてくるものである。フッサールの超越論的立場は、実在的对象関係に対して現出のダイナミズムを先行させるものであるといえることができる。

他方で、フッサール現象学の実在的对象成立以前の光景は、脱中心化とはいっても、すべての存在を自らの意識領域に還元する、一種の観念論ではないのかと問い返せる。実際、『イデー1』の還元論が超越論的主観性の領域への還元であったことを考えてみれば、この嫌疑は不当ともいえない。さらに、それは事象上からも理由のある立場なのだとして主張することもできるかもしれない。指示空間が、私の状況

把握に基づくということは、その状況自体、それを把握している私の体験の内容になっているということだ。「实在」にせよ、「妄想」にせよ、あらゆる対象は、私の体験内容とみなすことができる。この体験する「私」は、あらゆる対象の条件である以上、単に世界内の一つの事物とはみなせない。こうした考え方はカスタネダの超越論的プレフィクスの議論と類似する。世界に関するすべての命題を「私は思う」というプレフィクスに接続されるバルーンの中に入るとするカスタネダの主張は、世界全体を思念の相関者とするフッサールのデカルト主義と、その発想を共有する。ただし、この立場から出発することに相当の意義が認められるとしても、その限界は見定めなければならないだろう。超越論的プレフィクスにせよ、コギトの発展形態としての志向性にせよ、その「われ思う」の形式の中に、出会われる事象をすべてが内蔵されるとき、この形式的枠組み自体が、それ以上遡れぬものとして前提されることになる。しかしフッサールもカスタネダも、「考える私」が超越論的性格をもちつつ「今、ここ」という現象性格をもつことを主張しているのである。しかし「今、ここ、私」がそのように把握される限り、つまり把握の内容となる限り、たとえばカスタネダであればバルーンの中に「考える主体」をおき入れねばならなかった。フッサールにとって、世界に属する実在的人物としての「私」は「現象として、それ自身対象極であり、相関的志向性の極」であり、超越論的主観、「すなわち世界構成のために作動しつつある主観」は「自我極としてのみ考察される。」(Hua.VI, S.186f.)しかしこれでは、対象としての「私」は、それをとらえる主体である「私」とどうして同一のものといえるのか、という反省論の陥穽をまぬがれない。言語構造であれ、志向性の構造であれ、この主客形式を前提する限り、そもそも「私」が「私」を指示するとか、「私」自身を反省する、という事態の説明において常に自己分裂がひき起こされる。しかしフッサールはこの立場に留まっていたわけではない。彼が発生論的分析でとった道は、世界内の「今、ここ」にいるものとして把握される対象としての「私」を、経験の現出形態が構成された後に現れる、事後的なものともみずばかりではなく、対象化以前の、「世界構成のために作動しつつある主観」をも、現出の自己構成の過程で成立したものとみなすというものであった。超越論的な「私」は、経験的な時空位置を構成する志向性であるが、経験の時空に先立つ現出現場の「今、ここ」性を有する。さらにその発生過程へと遡り、現出形成の原初的プロセスの有する自己関係性が問いつめられていく。自我極としての超越論的自我はむしろこの現出の自己形成の所産である。発生的現象学においては、対象のみならず、いわゆる超越論的自我に対しても現出が先行する。

つまりフッサールは超越論的構造を指摘するだけではなく、その生成をさらに問うのであるが、それはどのような意味をもつのか。カスタネダのように超越論的構造を形式として定式化するにとどめる時、その超越論的構造のうちに示された「今、ここ」の現象性格が、超越論的で形式的な「今、ここ性」と、経験的内容としての「今、ここ」とに分裂してしまう。結局、「今、ここ」の内実は対象的な現出に回収されてしまい、超越論的機能自体の現象性格を問えなくなる。それに対し、そもそも超越論的現象学は、超越論的次元における「今、ここ、私」を単なる形式ではなく、世界内の諸事象に相関した作用諸形態の内実を含んだ超越論的事態としてみと

める立場である。しかしそれが静態的構造の指摘にとどまるならば、超越論的な「今、ここ」は、超越論的構造を前提した上での事後的な場面でしか問えなくなり、現象性格の追究としては不徹底となる。超越論的自我—内世界的自我の分裂のような反省論的構図にもとりこまれもする。フッサールがさらに発生論的分析をすすめたことの意義は、超越論的構造自体の発生を問うことで、そうした分裂以前の場面まで現出の先行性を徹底させたことにある。超越論的構造の発生という事態は、形式的構造や経験的に把握された内容の手前にあり、また通常の意味での实在論や観念論といった枠組みの手前にあるといわなければならない。こうした事象は通常概念や対象関係に先行するため、遡行プロセスの文脈を通して示していく他ない¹⁴。そうした極限的レベルでの分析ゆえに、立場を異にする論者の議論との対話的考察は容易ではないが、現象学的営みの意味を一層明確にするために、試みる価値のある課題であろう。

<文献>

フッサールの著作については Husserliana からの引用である場合には Hua.と巻数のみ示した。また *Logische Untersuchungen I, II*, Tübingen, 1980 および *Formale und transzendente Logik*, Tübingen, 1981 からの引用はそれぞれ LU および FTL と略記した。

Castañeda, H-N.[1966]: 'He':a Study in the Logic of Self-consciousness, in : *Ratio*, vol.8, rep. in : Castañeda [1999], p.35-60.

_____ . [1999]: *The Phenomeno-logic of the I*, Bloomington, Indianapolis.

Chisholm, R. M. [1981]: *The First Person —an Essay of Reference and Intentionality*, Minneapolis.

Frege, G. [1918]: *Der Gedanke —eine logische Untersuchung*, in: *Beitrage zur Philosophie des deutschen Idealismus 2*, 1918-1919, S.58-77, rep. in: Frege, G., *Logische Untersuchungen*, hrsgb. von Patzig, G., Göttingen, 1976², S.30-53. (黒田・野本訳『フレーゲ著作集』勁草書房、1999)

Lewis, D.[1979] : *Attitude De Dicto and De Se*, in: *The Philosophical Review* 88, p.513-543.

Mulligan, K. and Smith, B. [1986]: *A Husserlian Theory of Indexicality*, in : *Grazer Philosophische Studien*, vol.28, p.133-163.

Perry, J. [1979] : *The Problem of the Essential Indexical*, in : *Nous* 13, p.3-21.

Shoemaker, S. [1968] : *Self-reference and Self-awareness*, in: *Journal of Philosophy* 65, p.555-578.

Smith, D. Woodruff [1984] : *Husserl on Demonstrative Reference and Perception*, in: Hubert L. Dreyfus(ed.), *Husserl, Intentionality and Cognitive Science*, Cambridge, Massachusetts, London, p.193-213.

野本和幸[1997]:『意味と世界』法政大学出版局。

¹⁴ ここで現象学的記述言語が一種の指示的性格をもつといいうるが、無論それは通常の対象認識における指示とは異なるレベルの話であり、分析される事象と分析状況との相即という高度に方法論的な場面における指示であるので、これは稿を改めて論じるべき事柄であろう。